

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2008
 課題番号：19500204
 研究課題名（和文） 治療の一助としての病院患者図書館の可能性と普及への総合研究
 研究課題名（英文） The general study of possibility of the hospital patient library as the help of the treatment.
 研究代表者
 前田 稔(MAEDA MINORU)
 東京学芸大学・教育学部・講師
 研究者番号：20376841

研究成果の概要：約 5600 病院を網羅した往復はがきによる調査，及び各地の病院の視察および意見交換により，本来の目的の一つであった病院患者図書館の日本における状況が判明してきた。日本において病院患者図書館が拡大しつつあり，現場の声として医療従事者や患者が強い興味を示す傾向がうかがわれた。また，比較対象として老人ホームにおける読書環境の概況を明らかにした。さらに，日本の病院患者図書館の可能性を考える上で，既に普及段階にある世界の状況も調査し，イギリスの St. Tomas' Hospital が完璧ともいえる患者図書室を設置していることが解り，NHS Direct や BBC Health, CILIP の Health Library Group に問い合わせ中である。近年の患者意識の変革が，病院患者図書館の位置づけにも影響し，増加傾向に拍車をかけていた。公立図書館との連携や感染症に対する理解が未熟である点が課題となっていることがわかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	210,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	420,000	2,080,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：病院患者図書館、セカンド・オピニオン、図書サービス、専門司書要請、医療倫理

1. 研究開始当初の背景

先進諸国では既に定着しつつある病院患者図書館が，医療において革新的な役割を果たすことが提唱されている。日本では 1974 年に始まった調査を 7 年ぶりに継続調査するこ

とで，日本の医療諸問題の解決の糸口を模索するという背景をもつ。

2. 研究の目的

増え続けている医療紛争や医療費増加の

軽減、および医療体制の変革による患者主体の医療情報サービス提供等を、増加傾向にある病院患者図書館という新しい視点で捉え、対策を模索する目的がある。

この目的を次の3つのサブプロジェクトとして構成した。

(1) サブプロジェクトⅠ 病院患者図書館全国調査（アンケート）

本調査の主目的は、病院患者図書館の数が増加傾向にあるのか否かを過去の実態調査と照らし合わせつつ明らかにする点にある。

第二に、病院患者図書館が存在している施設について、担当者や本の種類、利用対象と方法に関する傾向を、往復葉書による調査という限られた資源のなかで最大限把握することを目指した。

第三に、施設としての図書館から一步はなれ、通院患者および入院患者の読書環境の観点から、病院と図書とのかかわりの現状を理解すべく、質問項目を策定した。

第四に、地域の健康情報拠点としての病院の役割に着目し、公立図書館との連携状況および連携の可能性を見いだすことに狙いを定めた。

(2) サブプロジェクトⅡ 老人ホーム全国調査（アンケート）

高齢者の読書環境の観点から、病院よりも高齢者として強い特徴を有する老人ホームへのアンケート調査を行うことで、問題の所在を探る。

(3) サブプロジェクトⅢ チーム作業：病院患者図書館視察および海外状況調査

連携研究者とのチーム作業により、日本や海外の状況調査を行うことで、医療現場における現状を明らかにし、また、海外との比較のなかで、日本の現状を位置づけることに注力する。

3. 研究の方法

(1) サブプロジェクトⅠ

ここでは、特にサブプロジェクトⅠの方法について詳しく述べる。

全国の病院（総覧およびインターネットを参照）に患者専用の図書館の設置状況、詳細、未設置の場合は今後の設置予定の有無、病院患者図書館に関する意識、等を往復はがきによるアンケート調査をした。また自由記載欄を設け、担当者による自由な意見を記載してもらった。実際の病院患者図書館への現地調

査で、現状の把握を試みた。

これまでの調査対象病院は、1974年調査では400機関、1984年調査および1994年調査では1200機関、2000年調査では2000機関であった。同規模の調査を目指し、本調査では、独立行政法人福祉医療機構の病院情報データベース”WAMNET” (<http://www.wam.go.jp>) から約5600病院を抽出して行った。

調査手法は、往復葉書による質問調査である。送付および回収は2007年9月から2009年2月の間に行った。

記入集計上の工夫として神奈川県立総合教育センターのフリーソフトウェア”Mark Scan

(<http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/markscan>)によるマークシート方式を採用した。

返却された葉書は、市販のドキュメント向けイメージスキャナで画像を読み取りPDF形式で保存した後、Mark Scanでマークシートからテキストファイル(csv形式)に変換し、集計を行った。

一連の作業にはMicrosoft ExcelとMicrosoft Accessを適宜使用した。Microsoft Accessを用いたのは、マークシート回収結果と病院情報とを病院整理番号をキーにして照合させるためである。また、csvファイルにはマークあり/なしの情報のみが記載されているにすぎず、必ずしも分析に適しているわけではない。そこで、C#言語による独自ソフトウェアにて整形したほか、病院整理番号を2進数から10進数に復号した。さらに、Excelの音声合成機能で返信葉書原本と集計データの最終チェックを行うための加工も行った。

質問項目としては、問1および問2は公立図書館と病院との連携状況を確認する項目である。回答者が必ずしも図書に詳しい担当者とは限らないことから、総務担当事務職員でも回答しやすい項目を冒頭に優先した。

まず、問1では「近隣に公立図書館はありますか」と尋ねた。通院患者が公立図書館で図書を借りたあとに”徒歩”で病院に行き、外来を終えた後に返却できる距離が想定されており、また、入院患者も容易に一時外出できる範囲として、「徒歩5分以内」という選択肢を設けた。さらに、「徒歩20分以内」という選択肢をつくった理由は、”自家用車”で通院する外来患者が立ち寄れる範囲を想定したためであり、また、病院と公立図書館との相互連携の難易度の分かれ目であると考えたからである。

問2には「公立図書館と病院との連携はありますか」という項目を設けた。そもそも”連携”の概念は多義的ではあるものの、公立図書館と何らかの連携を行っている病院数が少数であると予想できたため、詳細に立ち入ることは今後の個別調査に委ねる方針で

ある。また、返信宛名面に自由記載欄を設けることで、任意の回答を期待した。

問3から問4は、患者の読書環境一般を調べるために設けた。問3には、「院内に患者向けの本棚はありますか」という内容で、「入院用あり」「通院用あり」のそれぞれを複数回答可能選択肢として用意した。本棚といっても、設置形態については極めて多様性に富んでいることが予想できる。そして、本棚の概要の推定には、院内において本棚の設置されている場所、本棚の数、冊数の調査が寄与する。しかし、今回の研究の主眼は病院患者図書館の実態把握であり、返信担当者の負担を可能な限り低減するためには、手間のかかる作業を要するこれらの項目については割愛した。

一方、本棚内容の全体傾向を探るために、問4において、「患者向けの本棚がある場合の本の種類」を組み入れることにした。本の種類をみることにより、各病院の本棚がどのような目的で設置されているのかを捉えることが可能であると思われたからである。本の種類には「医学資料」「闘病記」「一般書」「漫画」「雑誌」「パンフレット」「健康ガイド」「新聞」の欄を設けた。

さて、本研究の主題である病院患者図書館に関する質問が問5以降に続くことになる。問5では「院内に独立した患者向けの図書室はありますか」という質問により、いわゆる病院患者図書館の有無を問うている。さらに、今回の調査の主眼である、病院患者図書館拡大の勢いをみるために、問5には「設置検討中」の選択肢も用意した。ところで、独立した患者向けの図書室には、単なる小さな本棚が存在している部屋から、公立図書館の分館規模の大きなものまで、かなりの幅が予想できる。このため、おおよその傾向を探るために、問5で「あり」と回答した病院に限り、問6から問8までの質問を引き続き用意した。

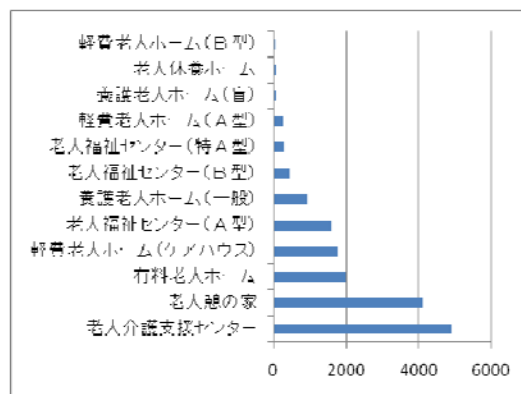
問6では病院患者図書館の担当者について「図書館司書」「看護師」「他職員」「ボランティア」の4区分に分けて調査した。菊池の研究によれば、実質的に患者図書館というべきものは、『担当者』『資料』『専用の図書室』の3条件が揃ったことが不可欠であるとされている。そして、菊池の行ってきたこれまでの全国実態調査においても、「図書館司書」「看護師」「他職員」「ボランティア」を質問項目に含ませてきている。したがって、今回の調査でもこれにならうことで、過去の結果との比較が行えるようにした。

問7では、問4と同じの細目を設けて本の種類を選択できるようにしてある。問4では本棚一般について質問であったのに対して、問7では独立した図書室について限定されている点で異なる。また、問8は利用対象と

方法についての項目であり、利用対象として「入院患者」「通院患者」「職員」「一般人」を、方法として「貸出」「病棟へ配本」の項目を設けた。問8は他の質問項目よりも凝縮されている感が否めないとはいえ、個々の病院患者図書館の特性を掘り下げる研究は、先行研究および今後の調査に委ねることにした。

(2) サブプロジェクトII

まず、「WAMNET」から全国の老人ホーム情報16237カ所をダウンロードした。



さらに、ここから、1000カ所を無作為抽出して、サブプロジェクトIに準じたアンケートを送付した。ただし、問題の所在を探るために、自由記載欄を重視した点が異なる。

(3) サブプロジェクトIII

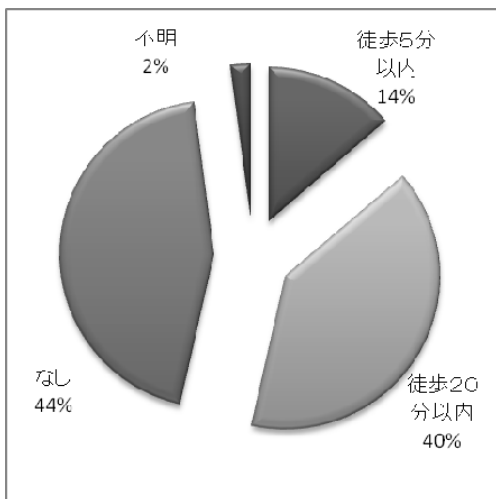
チーム会議を半年に1回程度行い、各自分かれて、病院患者図書館に関する現地調査を行った。また、英国の病院患者図書館状況の情報収集を継続的にを行い、会議で相互報告を行った。

4. 研究成果

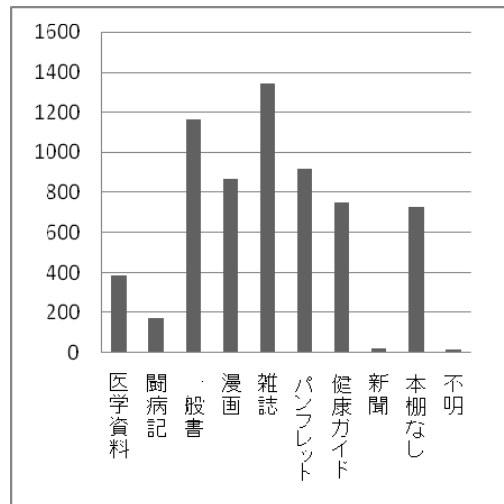
(1) サブプロジェクトIの結果

約2400件の回答があり、7年前と比べ、格段に患者図書館が増えていることが明らかとなった。

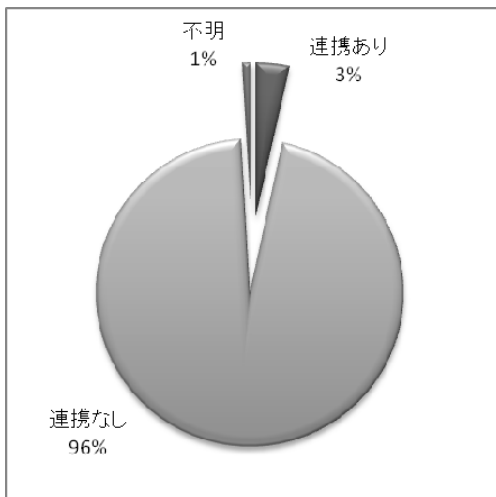
また、患者の利用状況や医療従事者の考え、司書からの意見など、貴重な情報を得ることができた。



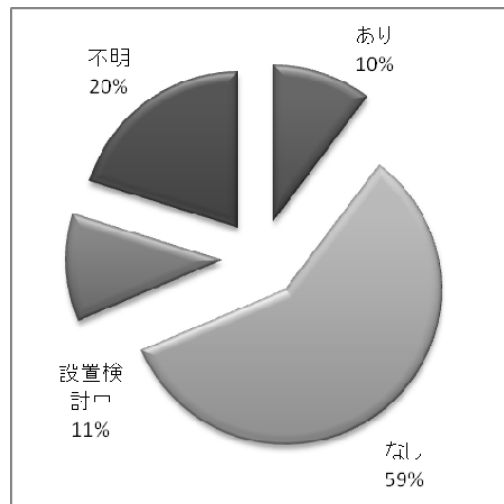
問1 近隣に公立図書館はありますか



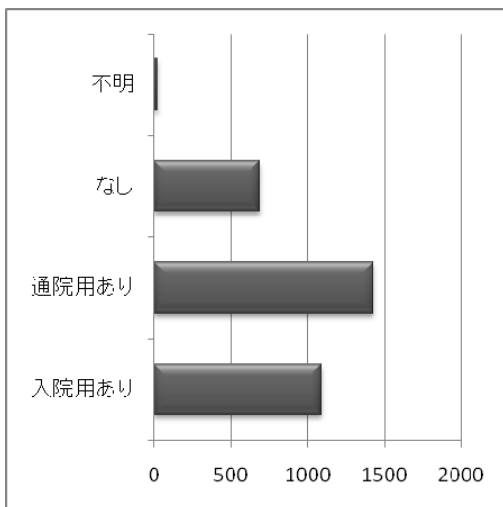
問4 患者向け本棚がある場合の本の種類



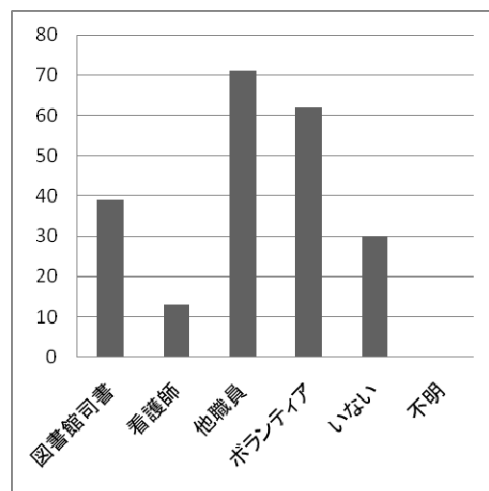
問2 公立図書館と病院の連携はありますか



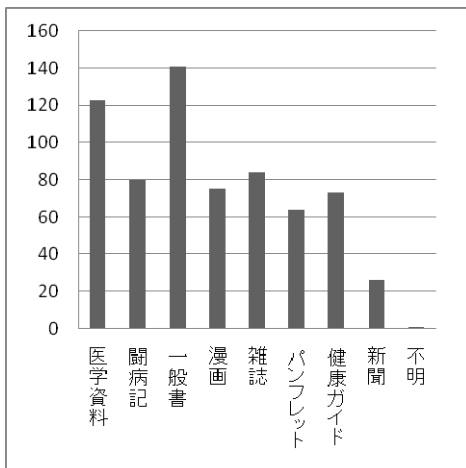
問5 独立した患者向けの図書室はありますか



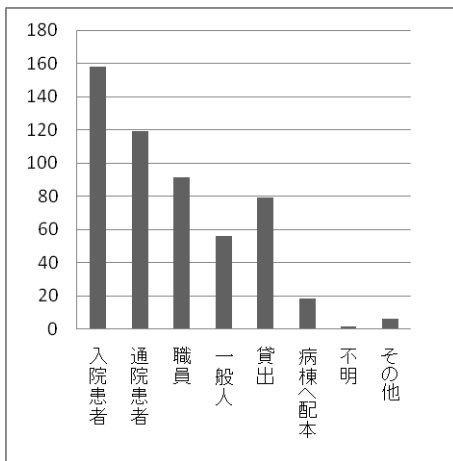
問3 院内に患者向けの本棚はありますか



問6 図書室の担当者はいますか



問7 図書室に設置されている本の種類

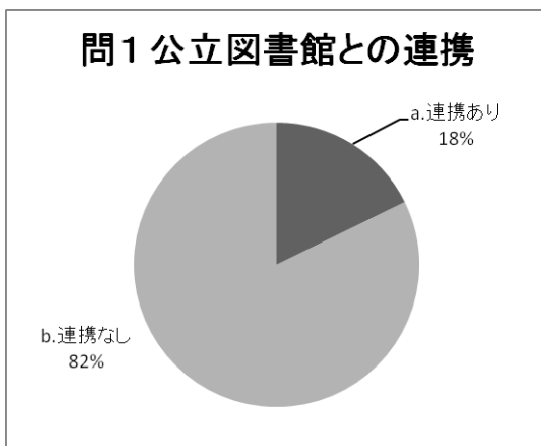


問8 利用対象と方法

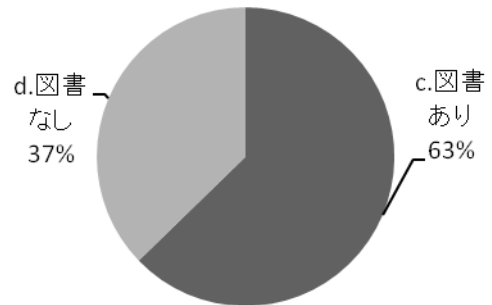
(2) サブプロジェクトIIの結果

約 290 件の返信があり，老人ホームにおける，読書環境の概況が明らかになった。

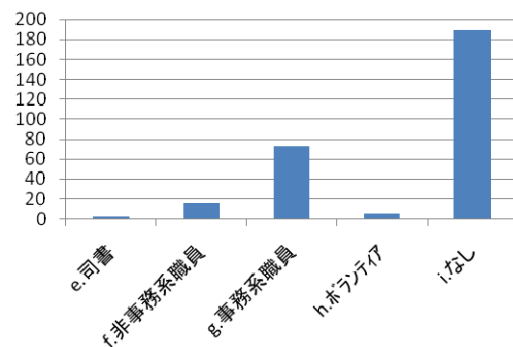
問1 公立図書館との連携



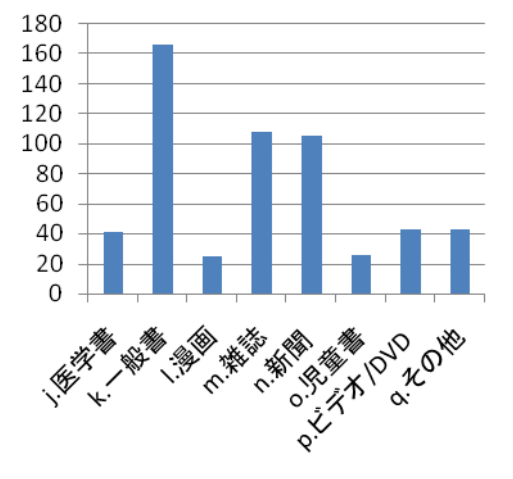
問2 施設の図書数 (除職員専用)

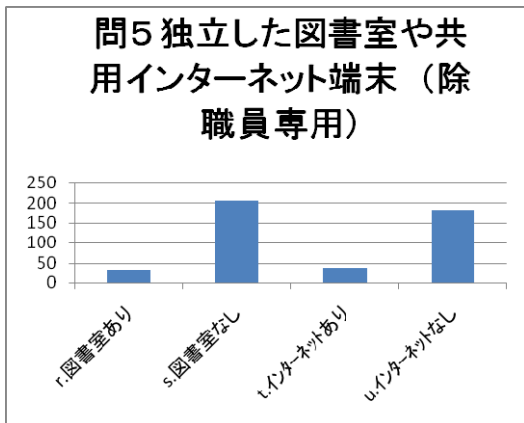


問3 図書の担当者



問4 種類





(3) サブプロジェクトⅢの結果

視察による実際の声から現時点における日本の状況が導き出された。世界レベルとの比較として、イギリスの St. Tomas' Hospital や CILIP の Health Libraries Group からの情報なども得た。引き続き、病院へのアンケート調査や海外の情報、高齢化社会対策として高齢者施設への可能性や公共図書館との連携等も、これからの課題として残った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①前田稔『MarkScan を使用した往復はがきマークシート調査の試み—病院患者図書館全国調査における情報処理』東京学芸大学紀要総合教育科学系 2009 年

②前田稔『病院における読書環境—健康情報と患者の権利』LISN 138 号 2008

③前田稔『構造転換期における学校図書館の法と政策』図書館界 60 巻 3 号 2008 年

[学会発表] (計 2 件)

①前田稔「病院患者図書館調査と図書館間連携：健康フォーラムの形成」日本図書館情報学会 2008 年

②Minoru Maeda “THE ROLE OF THE HOSPITAL IN SUPPORT OF THE RIGHT OF READING—FROM JAPANESE HOSPITAL PATIENT’S LIBRARY INVESTIGATION 2007—” Asia-Pacific Conference on LIBRARY & INFORMATION EDUCATION AND PRACTICE

[その他]

①前田稔『2007 年度病院患者図書館設置状況調査—100 症以上の病院における読書環境』2008 年

浜松赤十字病院の病院患者図書館をビデオ撮影し、英文を加え編集したうえで、Asia-Pacific Conference on LIBRARY & INFORMATION EDUCATION AND PRACTICE にて、参加者に DVD を配布した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 稔 (MAEDA MINORU)
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号：20376048

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

菊池 佑 (KIKUCHI YU)
日本病院患者図書館協会・会長

Maurice E. Jenkins
元 BRITISH COUNCIL

前田 まゆみ (MAEDA MAYUMI)
東京医科歯科大学・病態生化学・研究員